

知的障害児との教科を通じた「共同教育」実践の特徴

—1970年代の京都府立与謝の海養護学校と宮津市立上宮津小学校における事例を踏まえて—

○金丸彰寿

(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

KEY WORDS: 「共同教育」、京都府立与謝の海養護学校、知的障害

1. はじめに

インクルーシブ教育構築の方策の一つである「交流及び共同学習」は、通常学校及び特別支援学校学習指導要領に基づき、双方の学校の教育課程に位置付け、年間の指導計画を設定するような、系統的な取り組みが求められている(文部科学省, 2012)。しかし「交流及び共同学習」の中でも知的障害児との実践においては、障害のない子どもとの学力や発達段階の著しい差から、教科の授業として成立しにくいことが指摘されている(富永, 2011)。この「交流及び共同学習」の課題は、1970年代に制度化された「交流教育」からの課題でもあるとされる(大久保, 2007)。

ところで1970-80年代には、「交流教育」に価値対抗的な実践運動として「共同教育」が展開された。「共同教育」は、子ども達の「発達に応じて」、学習権の平等性を保障する「普通教育としての教育内容」を創出する実践運動であった(金丸, 2016)。その際、京都府立与謝の海養護学校(以下、与謝の海)は、京都府下ないし全国における「共同教育」実践や理論の向上に大きく貢献した(清水, 1984)。特に1970年代半ばの与謝の海と宮津市立上宮津小学校(以下、上宮津)との「共同教育」では理科などの教科でも行われ、知的障害児を対象にする教科面での萌芽的实践であるといえる。そこで本稿では、1970年代の与謝の海と上宮津における「共同教育」実践の概要を整理し、後に、教科での事例を中心に分析する。なお本稿は、与謝の海が発行する研究紀要『よさのうみ』を中心の史資料として用いる。

2. 与謝の海の「共同教育」の実践の概要と集団づくり

「共同教育」は、1972年6月、日本教職員組合委託により発足した、教育制度検討委員会の第2次報告書「日本の教育をどう改めるべきか」の中で提唱された。もともと与謝の海は、1971年から京都府立加悦谷高校の生徒との合同文化祭や、1972年から上宮津との合同音楽祭を通じた「交流」を行っていたが、1972年の第2次報告を受けて、1973年からの実践は「共同教育」の用語に統一した。それは、与謝の海が「交流教育」について、1972年障害児学習指導要領において、障害児の社会性の向上などの障害児のみに焦点を当てた教育目標と教育内容の記述を批判し、障害児と障害のない子どもの双方の発達を支える「共同教育」の理念に賛同したからであった。

その考えの背景には、与謝の海において、障害児は決して「特殊な子ども」ではなく、特に知的障害児は障害の有無に拘わらず共通する発達の道すじを歩む存在であるという発達観及び、その発達を保障する上で多様な集団づくりを行う必要があるという実践の理念があった。与謝の海は、「共同教育」に限らず、例えば小学部の1年生から6年生までを縦割りの4つの集団に区分した「基礎集団」を核にし、教科学習、労働学習や行事学習の集団など多様な集団を構成した。そして「共同教育」において、障害児のみの集団に留まらず、障害のない子ども集団との「共同学習」を通して、「相互の矛盾のぶつかり合いや、共通する問題の確かめ合い」を行い、子ども同士の要求を高めることが目

指された。さらに与謝の海は、上宮津など通常学校の教職員との討議・合意を図りつつ、障害児と障害のない子どもに、共通または独自の教育目標を設定した。

3. 知的障害児との教科を通じた「共同教育」—宮津市立上宮津小学校との「芋づくり」の実践から

与謝の海と上宮津は、音楽祭、体育祭などの合同行事、稲刈り、薩摩芋づくりなどの労働や、工作などの図工的な学習を、「共同教育」として幅広く行っていたとされる。両校の教育課程の位置づけについては、与謝の海では特別活動、労働の時間、理科、図工、音楽、体育の時間であり、上宮津では特別活動、理科、図工、音楽、体育の時間であったとされる。その際、例えば行事は、基本的に特別活動でありつつも、その準備や練習は音楽や体育の授業で行う等、柔軟な指導計画が設定された。

こうした中、両校は、1975年6月に、行事の枠を超えて『教科』の中での『共同教育』を追求した(京都府立与謝の海用学校, 1976)。それは、理科の教科で行う薩摩芋作りである。もともと上宮津の4年生が、理科の授業で薩摩芋作りを勉強しており、一方、与謝の海の小学部では、薩摩芋を植えようと話し合いがなされていたこともあって、両校の「共同教育」として、「芋づくり」の単元が理科の授業で設定されたのであった。実践では、上宮津の子どもは、「養護学校の人は、きいとらんようでも、どんな細かいことでも、聞いてんなる。ぼくらのほうが、ほんとうに勉強させてもらった」という感想文を綴った。上宮津の子ども達は、薩摩芋の生態や成長について、与謝の海の子ども達に分かりやすく教えることで発展的に理解を深めたとされる。対して与謝の海の子ども達は、上宮津の子ども達に教えてもらい、薩摩芋の構造や成長について基本的な知識を集団的に深めることができたとされる。与謝の海の子どもの中には、上宮津の子どもが「よく勉強してえらいなあ」とその姿に感心する姿も見られた。

4. おわりに

与謝の海と上宮津の「共同教育」の内、「芋づくり」の実践では、障害児と障害のない子ども集団に、教科内容としての科学性や文化性のように、障害の有無に関わらない「普通教育」の内容を共同で学ばせた。ここでは、学力や発達段階の差を、ネガティブな課題としてとらえずに、障害児は基本的な知識の習得、他方、障害のない子どもは発展的な理解を図るというように、子どもの「発達に応じる」ことで、学びの多様性としてとらえて実践が展開されていたといえる。こうした「共同教育」の理念や「発達に応じる」視点・手法は、現代の「交流及び共同学習」に示唆を与えるものと思われる。なお今後の研究では、1980年代の実践にも視野を広げつつ、網羅的に実践記録の収集・検討や教員などへの聞き取り調査を行うことで、1970-80年代の「共同教育」実践の展開過程を解明する必要がある。

文献は当日資料にて示す

(KANAMARU Akitoshi)